レポート

アジアの豊かさと環境意識
―アジア4都市のライフスタイル比較調査から―

ニッセイ基礎研究所　生活研究部　主任研究員　栗林　敦子
東京大学　大学院人文社会系研究科　朴　奎相
東京大学　社会情報研究所　助教授　須藤　修

<要　旨>

1．東京、ソウル、上海、ジャカルタの4都市において、国と個人の経済状況についての認識を調査した結果、5年前と比べ経済的に成長し、豊かになり、これからも期待できそうだという回答は、ジャカルタ、上海、ソウル、東京の順に多い。また、個人の経済状況への満足度はジャカルタを除いてかなり低い。

2．ライフスタイルについては、経済発展が進んでいる都市ほど、物質的な満足を求める生活から生活の質や精神的な満足を求める生活へと、重点が変化していることがわかった。特に、ここ5年間では、東京の人々が自分なりのスタイルの生き方を追求するように変化したことが特徴的である。経済状況の満足にもそのような生き方が関係を持っている。

3．認識している環境問題は、4都市とも身の回りの環境汚染が中心であり、東京を除けば、飲み水、ゴミ、大気汚染が3大問題となっている。東京の人々がオゾン層の破壊の破壊を2番目の深刻な問題としたのをみれば、経済発展が生活の関心をより広くしているとも考えられる。

4．環境に対する考え方については、4都市とも「今後環境問題が深刻化する」、「経済成長よりは優先すべき」という考えを支持する人が多かった。ソウルでは、どの考えに対しても支持する人が一番多かったが、これは最近の一連の社会問題と大型事故が主に大手企業や政府傘下機関によるもので、社会的不満や、特に企業に対する不満が多かったからではないかと思われる。

5．行っている環境保全行動は国の制度や商品の流通、生産の有無との関連で異なる面がみられ、国によっては行動に移す環境に置かれていないともいえる。しかし、4都市ともに環境運動の参加や環境団体への寄付などの実施が少ないこと、身近な環境問題だけを見ている姿勢があることから、積極的な意志や意識を持っているとはいえない。「行動のための環境未整備」よりも「意識面での遅れ」の方が大きな要因となっているようだ。

6．経済発展段階による人々のライフスタイルの変化は、今後も継続的な調査が必要であると思われるが、本調査ではライフスタイルに経済発展段階の影響がある程度はあるということを確認できた。それは、もちろん、国の制度や環境にもよるが、物質的な満足を追求した結果、生活の質の面にライフスタイルの重点を移すことになることも確かである。経済発展とともに物質的な満足の経済成長を追求する過程は、様々な社会問題を惹起し、それが人々の意識に少なからぬ影響を与えている。

はじめに

激動する世界の政治や経済、深刻さを増している地球環境問題、情報化の進行によるボーダレス社会の到来、といったような今日を象徴する言葉はもはや新しいものではなくなった。この激しい変化の時代の中で、工業化社会への道を歩み始め、かつて例のなかった速さで成長を続けているアジア地域の変化は世界の注目の的になりつつある。この地域の変化は経済の面だけではなく、人びとの意識や様々な行動にまで及んでいる。

本稿は、このような中で、経済発展段階の異なるアジア地域の4都市、東京、ソウル、上海、ジャカルタで生活している人々を対象に、経済状況と環境問題に対する態度を明らかにし、これからの未来を展望しようとする目的で行われた「アジアの経済成長とライフスタイル調査研究」(注)の一部を、アンケート調査の結果を中心に紹介するものである。

(注)「アジアの経済成長とライフスタイル調査研究」について

1. 背景と目的

「社会経済の予測は、過去の経済指標だけではなく、生活者のもつ現在の経済状況に対する意識や未来への期待まで含めて行われるべきだ」という認識のもとでの調査研究はすでに1960年代からあった。これらの既存の研究は、経済データと心理的なまた社会的なデータとを別々に扱ったために、社会変化をより正確に予測できなかったことへの反省から生まれた。マクロレベルの政治・経済次元と個々人のミクロレベルのライフスタイルは相互作用しながら社会を変化させているといえる。

本調査研究ではこのような認識をもとに、ライフスタイルを一般的な幅広いもの、環境問題関連のものに分けている。環境問題は工業化と都市化が進んでいるこの地域においては、今後の発展に際しての制約要因になる可能性が高いからだけではなく、情報化とともに未来を語る核心的なキーワードであるからである。したがって本調査研究では、経済発展段階が異なる4地域を比較し、次のようなものを確認しようとした。

a．国の経済状況の認識と個人の経済状況の認識との関係

b．個人の経済状況への認識と個人のライフスタイルとの関係

b－1　ライフスタイル全般

b－2　環境問題に関するライフスタイル

c．環境問題に対するライフスタイルの形成と環境関連情報との関係

2．研究手法

手法としては、以下のアンケート調査および現地でのインタビュー等を用いた。

アンケート調査概要

1）調査地点と対象数

日本：東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、300サンプル

韓国：ソウル市、301サンプル

中国：上海市、303サンプル

インドネシア：ジャカルタ、299サンプル

2）対象者抽出法

日本：1都3県の人口比により15地点を系統抽出し、地点ごとに性年齢で標本を割り付け地域抽出法により抽出

韓国：地点を人口比で抽出後、世帯をエリアサンプリング、世帯の中で無作為に対象者を抽出

中国：住民台帳をもとにした多段無作為抽出法

インドネシア：地点を人口比で抽出後、世帯をエリアサンプリング、世帯の中で無作為に対象者を抽出

3）調査方法：留置法

4）調査対象者

日本：25〜45歳の男女個人

韓国：25〜45歳の男女個人
中国：25〜45歳の男女個人、ただし、月収800元以上
インドネシア：25〜45歳の男女個人、ただし、世帯支出が月350,001ルピー以上
5）調査実施期間：1995年7月上〜中旬
6）調査実査機関：米国Gallup Organizationの調査対象国現地法人及び提携機関

3．研究体制
本研究は、ニッセイ基礎研究所生活研究部主任研究員：栗林敦子と東京大学社会情報研究所：須藤　修助教授、および東京大学大学院人文社会系研究科博士課程の朴　奎相氏との共同研究である。

1．対象地域の概況

アジア地域の経済発展については多くの議論があるが、政府の工業化政策や民間企業の自由で活発な活動が経済発展をリードし、国際環境もアジアの工業化に有利に働いたといえる。もちろん、発展の初期条件、既存資源、人口規模、産業政策の違いから、アジアの各国では、経済発展のパターンが異なる面も存在しているが、一様に産業の高度化が進行してきたことは確かである。工業化の進展を国の目標に掲げてきたアジア地域では、既に経済的な成功をおさめた日本、NIESがモデルになっているといえる。日本が高度成長時期にみせた環境問題などの社会問題を、どのように消化し後発的利益を自分のものにするかは各国の悩むところであるが、すでに無理な工業化推進のための弊害も出ている。韓国の場合は安全管理の意識の欠如に代表される問題や、中国とインドネシアは農村部の人口の流入に伴う急激な都市の拡大と不十分な社会インフラのため、貧富の格差の拡大、環境汚染、交通問題など、様々な社会問題が山積している。

この地域では工業化による最大の成果である雇用創出によって、農村部から都市部に労働力の移動があらわれ、またこの移住した人々は核家族化の傾向も見せる。これにより基本的な各種生活財の需要が創出され拡大する。そのなかで消費能力を持つ中間層の成長によって基本耐久財が消費され、この消費結果が次の生産段階にフィードバックされる。この循環が速いのがこの地域の特徴でもあるが、それは先進諸国がこの地域を生産基地ではなく消費市場として見なし、積極的に進出していることからまた促されている。

図表－1　各国の関連データ

	都市化率	一人当たり名目GDP				一人当たり民間消費伸び率		
該当年	1993	1980	1985	1990	1993	80-85	85-90	90-92
単位	%	米ドル				%		
韓国	74	1,620	2,340	5,450	7,458	6	8	8
中国	27	270	380	410	460	6	4	-
インドネシア	31	470	550	730	733	4	3	5

（ADB(1994), *Key Indicators of Developing Asian & Pacific Countries.*より作成）

2．経済状況についての意識とライフスタイルの変化

(1) 国の経済に対する意識と個人の経済状況感

ここでは、各都市の人々が、自国の経済やその成長についてと、自分自身の経済状況とその変化をどのように実感しているかをまとめる。国の経済と自分の経済を比較できるよう、自国の経済に関しては、

- この5年間にずいぶん成長した
- この5年間に国民が豊かになった
- 国の経済レベルは満足できる
- 国の今後の経済成長が期待できそうだ

の4項目、個人の経済状況については、

- この5年間にずいぶん収入が増えた
- 個人的にはこの5年間に豊な生活ができるようになった

・個人的には今の経済状態は満足できる
・個人的には今後は経済状態がもっと良くなると思う

の4項目を設定し、それぞれについてそう思うかどうかをたずねた。この結果を図表2に示す。

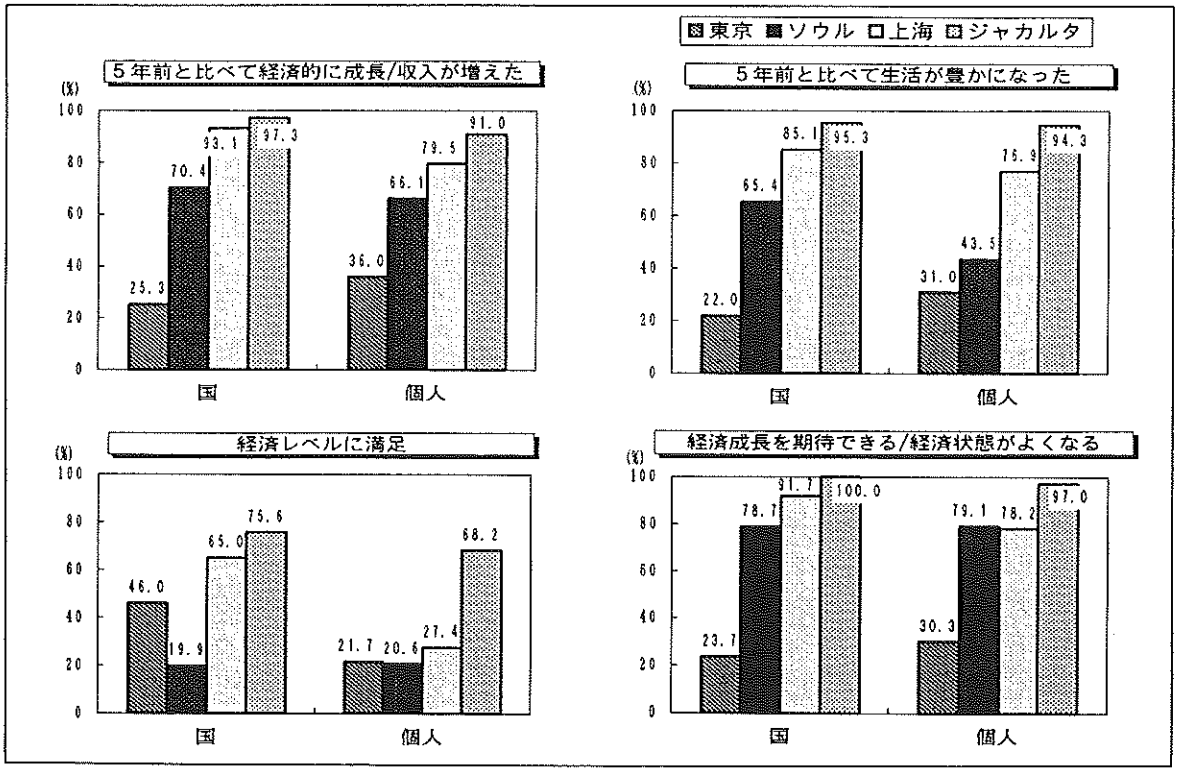
まず東京の人は、国と個人レベルの双方において、経済的に成長し、生活が豊かになり、これからも良くなると期待できるとはあまり思ってない。しかし他の都市と違って、5年前に比べ国(22%)よりは個人の豊かさ(31%)を感じている。

ソウルは5年前に比べて国は豊かになった(65%)が個人の生活はそうではない(66%)と答えた人が多かったが、それはこのアンケートが去年の一連の事故（橋の崩壊やデパートの崩壊とガス爆発事故など）の後に行われたので不安感を持っていたことが影響したとみえる。国、個人とも経済レベルの満足度(それぞれ20%、21%)が低かったのも、そのような不安要因があったからであると思われる。

一方、上海とジャカルタの人々は国の経済成長により自分を含めて国民皆が豊かになり、これからも期待できそうだと思っている。しかし上海の人々は自分の経済状態にはあまり満足していない(73%)。

国に対しても個人に対しても経済的な向上感がなく、満足していない東京の人々や、経済成長と豊かさとの乖離を感じながら経済状況を生活の面から認識し始めるにつれ不満をもつようになったソウルの人々とは対照的に、まだジャカルタの人々は自分の経済状況を国のそれと強く関連づけて意識しているのが特徴であろう。また、国と自分の状況に対する認識は、「経済レベルに満足」を除いた項目すべてにおいて、東京が最も少なく、ソウル、上海、ジャカルタと続くというパターンが一致している。これは国／個人別の四つの項目がある程度は関連して、人々の経済状況の意識に影響を与えているからであると思われる。

図表－2　国と個人の経済状況の意識



図表３は、国と個人の経済に関するそれぞれ４項目間の関係の有無をカイ２乗検定を使って調べたものである。表頭に示してある国の経済に対する意識と表側に示してある個人の経済に対する意識に関係がある場合に、それらに該当するマス目（セル）に＊印、あるいは＊＊印が示してある。

ジャカルタは図表２に示したようにほとんどの人がすべての項目を支持したためにこの手法では関係があると判断できるセルが少なかったが、他のどの国よりも自分の経済状況は国の経済成長に依存すると考えていることは、後のインタビューで確認できた。

一方、東京の場合は、印のついたセルが少なく、国と自分の経済を一体化して考える傾向が弱い。特に国の成長は個人の経済状況認識に何も影響を与えていない。

また、ソウルは、国レベルの経済や国民生活の豊かさの向上感と個人の経済状態向上への期待に関連性がある、つまり国レベルの経済状態が良くなったという変化を感じている人に限って、今後も期待していることがわかる。これに比べ、上海はこれまでの国レベルの経済の好転感と、個人の経済好転への期待とは結びついていない。

以上からいえるのは、既に東京は、主観的な豊かさや満足といったものが、客観的に示しうる国の経済状況では説明しきれないものになってることである。そして、他都市はまだそうなってはいないが、その兆候はうかがえる。

図表－３　国と個人の経済状態認識のカイ２乗検定の結果
（＊:有意水準5%　＊＊:有意水準1%）

＜東　京＞

個人＼国	5年前に比べ経済的に成長した	5年前に比べ国民生活が豊かになった	今の経済レベルに満足できる	これからの経済成長期待
5年前に比べ収入が随分増加した		＊	＊	
5年前に比べ豊かな生活になった		＊＊	＊＊	＊
個人的に今の経済状態に満足できる			＊	
今後は今より経済状態が良くなる				＊＊

＜ソウル＞

個人＼国	5年前に比べ経済的に成長した	5年前に比べ国民生活が豊かになった	今の経済レベルに満足できる	これからの経済成長期待
5年前に比べ収入が随分増加した	＊	＊＊		
5年前に比べ豊かな生活になった	＊＊	＊＊	＊＊	
個人的に今の経済状態に満足できる		＊＊	＊＊	
今後は今より経済状態が良くなる	＊＊	＊＊		＊＊

＜上　海＞

個人＼国	5年前に比べ経済的に成長した	5年前に比べ国民生活が豊かになった	今の経済レベルに満足できる	これからの経済成長期待
5年前に比べ収入が随分増加した	＊＊	＊	＊	
5年前に比べ豊かな生活になった	＊	＊＊	＊	＊＊
個人的に今の経済状態に満足できる		＊＊	＊＊	
今後は今より経済状態が良くなる				＊＊

＜ジャカルタ＞

個人＼国	5年前に比べ経済的に成長した	5年前に比べ国民生活が豊かになった	今の経済レベルに満足できる	これからの経済成長期待
5年前に比べ収入が随分増加した				
5年前に比べ豊かな生活になった				
個人的に今の経済状態に満足できる	＊＊		＊＊	
今後は今より経済状態が良くなる				

次に、図表4から、ここで使用した個人の経済に対する4つの意識の相互の関係をみると、東京と上海では、ここ5年に収入が増加した人でも今後もそれが継続することとは結びつかないと感じ、将来に対して不確実に感じている側面がうかがえる。また、ソウルでは、ここ5年に収入が増加した人でもそれが満足には結びついていない。

図表－4　個人の経済状態認識間のカイ2乗検定結果
（＊:有意水準5%　＊＊:有意水準1%）

＜東　京＞

個人＼個人	5年前に比べ豊かな生活になった	個人的に今のの経済状態に満足できる	今後は今より経済状態が良くなる
5年前に比べ収入が随分増加した	**	**	**
5年前に比べ豊かな生活になった		**	**
個人的に今の経済状態に満足できる			
今後は今より経済状態が良くなる			

＜上　海＞

個人＼個人	5年前に比べ豊かな生活になった	個人的に今のの経済状態に満足できる	今後は今より経済状態が良くなる
5年前に比べ収入が随分増加した	**	*	**
5年前に比べ豊かな生活になった		**	**
個人的に今の経済状態に満足できる			
今後は今より経済状態が良くなる			

＜ソウル＞

個人＼個人	5年前に比べ豊かな生活になった	個人的に今のの経済状態に満足できる	今後は今より経済状態が良くなる
5年前に比べ収入が随分増加した	**		**
5年前に比べ豊かな生活になった		**	**
個人的に今の経済状態に満足できる			**
今後は今より経済状態が良くなる			

（ジャカルタについては、前述の通り、どの項目においても回答が「そう思う」に偏っていたため、カイ2乗検定ができなかった。）

(2)　ライフスタイルの変化

「一般的なライフスタイル」として29項目を設定し、「5年以上前からそう思っていた」(a)、「ここ5年位にそう思うようになった」(b)、「そうは思わない」(c)の3段階で質問をした。図表5には、「5年以上前からそう思っていた」「ここ5年位にそう思うようになった」を合わせた「現在そう思う」（a＋b）割合と、「ここ5年位にそう思うようになった」(b)の割合を示している。

現在の状況として4都市で共通するのは「健康のため食べ物やスポーツをする事に心がけている」「家庭がうまく機能するためには男女の役割の分担が必要だ」「機会があればボランティア活動をしたい」と考える人が多いことである。また、東京とソウルに共通するのは、「国家の政策はあまり期待できない」「品質が同じ場合、値段が安ければメーカにはこだわらない」が多いことである。一方上海やジャカルタに共通するのは、「能力があれば、職場は自由に変えるのが当然だ」「良い社会をつくるためには、個々人の努力だけでは無理だ」が多いことと、「新しい情報機器の購入にはお金は惜しまない」ことである。都市ごとの特徴を記述すると、以下のようになる。

まず東京の人々は、他の地域に比べて、出世しようと努力しないし、社会的な地位もそれほど重んじていないし、先祖代々の伝統を守ろうとしない。消費の面では、なるべく調理済み食品は使わないが、値段と関係なく品質の良いものを買い、決済にはよくカードを使う。しかし新しいコンピュータや情報機器の購入には慎重で、4都市で一番、国の政策を期待できないものであると評価する。

ソウルの場合は、個性的な生き方をしたいと思いながらも、社会的地位を示すため自家用車や家が必要だと思う人が多い。また、夫婦二人だけの生活を充実させたいと思うし、将来のためよりは毎日を楽しもうとする傾向がある。あまり使わない旅行用品などは人から借りたり、値段が安ければメーカにこだわらない倹約する消費観を持って

いて、良い社会を作るための個々人の努力が重要だと見ている。また能力主義に対する拒否感が4都市の中で一番強く、職場に対する忠誠心を持っている人が約半数を占めている。

社会的地位や経済的成功を重視し、個人の努力だけでは良い社会は作れないと思う多くの上海の人々は、仕事以外のことから生きがいを感じる場合が多い。調理済み食品を使いたいと思い、外食の時安い店を選ぶ傾向があり、まだカード利用は定着していない。

家庭内での男女の役割分担、会社内の能力主義を認めながらも、伝統は守るべきだという考え方を持っているのがジャカルタの人々である。情報探索の行動も比較的積極的で、広告などから情報収集をしていて、情報機器の購入にも積極的である。またリスクがあっても資産を増やす手段を取

図表－5　各都市のライフスタイル

項　目	現在そう思う（各都市対象者に対する割合(%)、60%以上：網かけ、80%以上:太字）				ここ5年位にそう思うようになった（「現在そう思う」の内数(%)、20%以上に網かけ）			
	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ
1.他の人と違う個性的な生き方をしたい	46	71	56	26	13	18	12	9
2.ファッションのためにはお金や時間をかけても惜しくない	23	24	21	36	8	10	9	7
3.出世するためにはあらゆる努力を惜しまない	12	44	20	69	7	15	5	15
4.新しい商品は人より先に買う	10	12	19	29	3	7	8	8
5.能力があれば、職場は自由に変えるのが当然だ	61	49	82	92	26	13	19	10
6.先祖代々の伝統は守らなければならない	38	70	89	98	10	11	6	9
7.家庭がうまく機能するためには男女の役割の分担が必要だ	70	85	73	93	23	20	7	8
8.自分のことを考える前に他人のことを考えるほうだ	59	62	47	35	18	20	10	7
9.機会があればボランティア活動をしたい	65	82	63	89	38	18	12	15
10.仕事よりも仕事以外のことにむしろ生きがいを感じる	64	64	79	35	25	21	9	7
11.社会的地位や経済的な成功を重視するほうだ	31	62	67	55	12	19	14	12
12.値段は少し高くても品質のいいものを買う	77	66	73	44	25	13	16	5
13.調理済み食品や半調理済み食品をなるべく使いたい	13	38	63	35	7	17	21	4
14.将来のために備えるより毎日の生活を充実させたい	48	65	64	57	22	16	9	8
15.健康のため食べ物やスポーツする事に心がけている	79	86	68	97	37	27	14	9
16.テレビ番組やニュースの海外情報に関心がある	64	77	71	51	24	27	15	8
17.他人の意見より自分の規準でものを選択するほうだ	58	64	66	67	10	15	9	7
18.品質が同じ場合、値段が安ければメーカにはこだわらない	71	86	42	42	17	10	4	2
19.外食する時は、店は値段より雰囲気で選ぶ	57	49	34	52	17	14	9	5
20.多少のリスクがあっても投資をして試算を増やしたい	18	37	34	79	10	14	17	15
21.子供よりも、夫婦二人の生活を充実させたいほうだ	32	44	25	34	16	20	3	4
22.使用頻度の低い旅行やスポーツ用品は人から借りる	25	37	8	11	11	12	2	2
23.社会的な地位を示すには、自家用車や自分の家が必要だ	28	51	31	26	11	18	12	3
24.国家の政策はあまり期待できない	81	64	37	15	32	20	11	3
25.良い社会をつくるためには、個々人の努力だけでは無理だ	61	51	95	86	21	30	9	6
26.何か買う時には、いろいろ情報を収集して研究するほうだ	68	68	49	93	19	21	14	6
27.広告チラシやダイレクトメールは必ず目を通すほうだ	60	51	48	75	20	19	18	6
28.新しい情報機器の購入にはお金は惜しまない	19	35	51	56	10	16	17	3
29.よくカードを使って外食や買い物をする	27	23	9	16	17	13	5	4

り、仕事に自分の生きがいを感じる人も多い。そして、国の政策をかなり期待している。

「ここ5年位にそう思うようになった」の部分をみると、東京とソウルに大きく変化した項目が多い。これに比して、上海やジャカルタで大きな変化をした項目はわずかである。東京とソウルの場合、国家の政策に不満を感じ、個人の努力だけでは駄目だと思う人が増えたのは政治不信と各種事故や社会問題が相次ぎ起き、それが人々に否定的な認識をもたらした結果であると思われる。この2都市の「仕事以外で生きがい」「店は雰囲気で」「夫婦二人の生活充実」の項目の回答からは、上海とジャカルタに比べて、人々が求める物事の変化がうかがえる。

また4都市共通でここ5年に変化したとみられるのは、「他の人と違う個性的な生き方をしたい」「能力があれば職場は自由に変えるのが当然だ」「機会があればボランティア活動をしたい」などである。情報関連の項目（項目番号26～28）も、「5年以上前からそう思っていた」が多いジャカルタを除き、ここ5年間変化があったと思われる。物質的に豊かになり、生活の質的・精神的な面をより重視するようになったためと考えらえる。

ライフスタイル項目と個人の経済状況に対する満足と期待の項目との関係の有無を表しているのが図表6である。「満足」との関係を見れば、東京の場合は個性的生き方（項目番号1）と対人関係（同8）が、ソウルは流行消費行動（同4）、儒教の伝統（同6）、対人関係（同8）、仕事以外の生きがい（同10）の項目が、上海は仕事以外の生きがい（項目番号10）と旅行・スポーツ用品を人から借りること（同22）すなわち貸してくれる人がいることが自分の経済状況に対する満足と関係がある。いいかえれば、それらが満足感を生む要素となっている。ジャカルタは伝統を守り（項目番号6）、賢い買い物をし（同18）、雰囲気のいい店で外食をする（同19）ことが満足と関係があるが、満足している人ほど国家の政策は期待していない。

図表－6　ライフスタイルと個人の経済状態（満足と期待）とのカイ2乗検定の結果
（＊:有意水準5%、　＊＊:有意水準1%）

項　　目	今の経済状態に満足				今後は今より経済状態が良くなる			
	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ
1.他の人と違う個性的な生き方をしたい	*							
3.出世するためにはあらゆる努力を惜しまない					*			
4.新しい商品は人より先に買う		*						
6.先祖代々の伝統は守らなければならない		*		*				
7.家庭がうまく機能するためには男女の役割の分担が必要だ					*			
8.自分のことを考える前に他人のことを考えるほうだ	*	**						*
10.仕事よりも仕事以外のことにむしろ生きがいを感じる		**	**					
18.品質が同じ場合、値段が安ければﾒｰｶｰにはこだわらない				**				
19.外食する時は、店は値段より雰囲気で選ぶ				*				
21.子供よりも、夫婦二人の生活を充実させたいほうだ								*
22.使用頻度の低い旅行やスポーツ用品は人から借りる			*		*			
24.国家の政策はあまり期待できない				*				
27.広告チラシやダイレクトメールは必ず目を通すほうだ		*						

3．環境問題への関心と環境意識

(1) 深刻な環境問題

14種類の環境問題をあげ、その中で「深刻な問題」であると思うものを3つまで選んでもらったところ、回答率の上位3位は、東京では「ゴミ処理」(41%)、「オゾン層の破壊」(41%)、「大気汚染」(37%)、ソウルでは「飲み水の汚染」(77%)、「ゴミ処理」(64%)、「大気汚染」(64%)、上海では「飲み水の汚染」(71%)、「大気汚染」(62%)、「ゴミ処理」(39%)、ジャカルタでは「ゴミ処理」(57%)、「飲み水の汚染」(54%)、「大気汚染」(54%)となった。

東京の「オゾン層の破壊」が2位であることを除くと、調査対象のアジアの4都市では、飲み水、ゴミ、大気汚染が環境に関する3大問題であると認識されているようだ。中でも、ソウル、上海の飲み水の問題はともに7割を越える回答があり、人々にとって切実な問題であることがうかがえる。東京では、第1位の「ゴミ処理」が4割程度の回答にとどまっていることに示されるように、深刻とする環境問題が分散する傾向がみられる。

また、地球規模の環境問題としては「オゾン層の破壊」が東京（第2位)、ソウル・ジャカルタ（第4位）にあげられる程度で、この4都市で深刻な環境問題は、「身の回りの環境」に関するものが中心である（図表7）。

図表－7　深刻だと思う環境問題（複数回答）（上位6つまで）

	東京	ソウル	上海	ジャカルタ
第1位	ゴミ処理(41%)	飲み水の汚染(77%)	飲み水の汚染(71%)	ゴミ処理 (57%)
第2位	オゾン層の破壊 (41%)	ゴミ処理(64%)	大気汚染(62%)	飲み水の汚染(54%)
第3位	大気汚染(37%)	大気汚染(64%)	ゴミ処理(39%)	大気汚染(54%)
第4位	飲み水の汚染(30%)	オゾン層の破壊(24%)	騒音・振動・悪臭(38%)	オゾン層の破壊(25%)
第5位	食品安全性(26%)	騒音・振動・悪臭(18%)	身近な自然の減少(30%)	食品安全性(23%)
第6位	身近な自然の減少(23%)	食品安全性(14%)	食品安全性(22%)	騒音・振動・悪臭(21%)

(2) 環境に対する考え方

環境問題に関する10の考え方・態度を示し、それらについてどの程度指示するかをを聞いてみたところ、図表8の通りの結果となった。

どの都市においても共通する意識は、「これからも環境問題はますます深刻になる」で、4都市とも7割以上が「そう思う」と回答している。

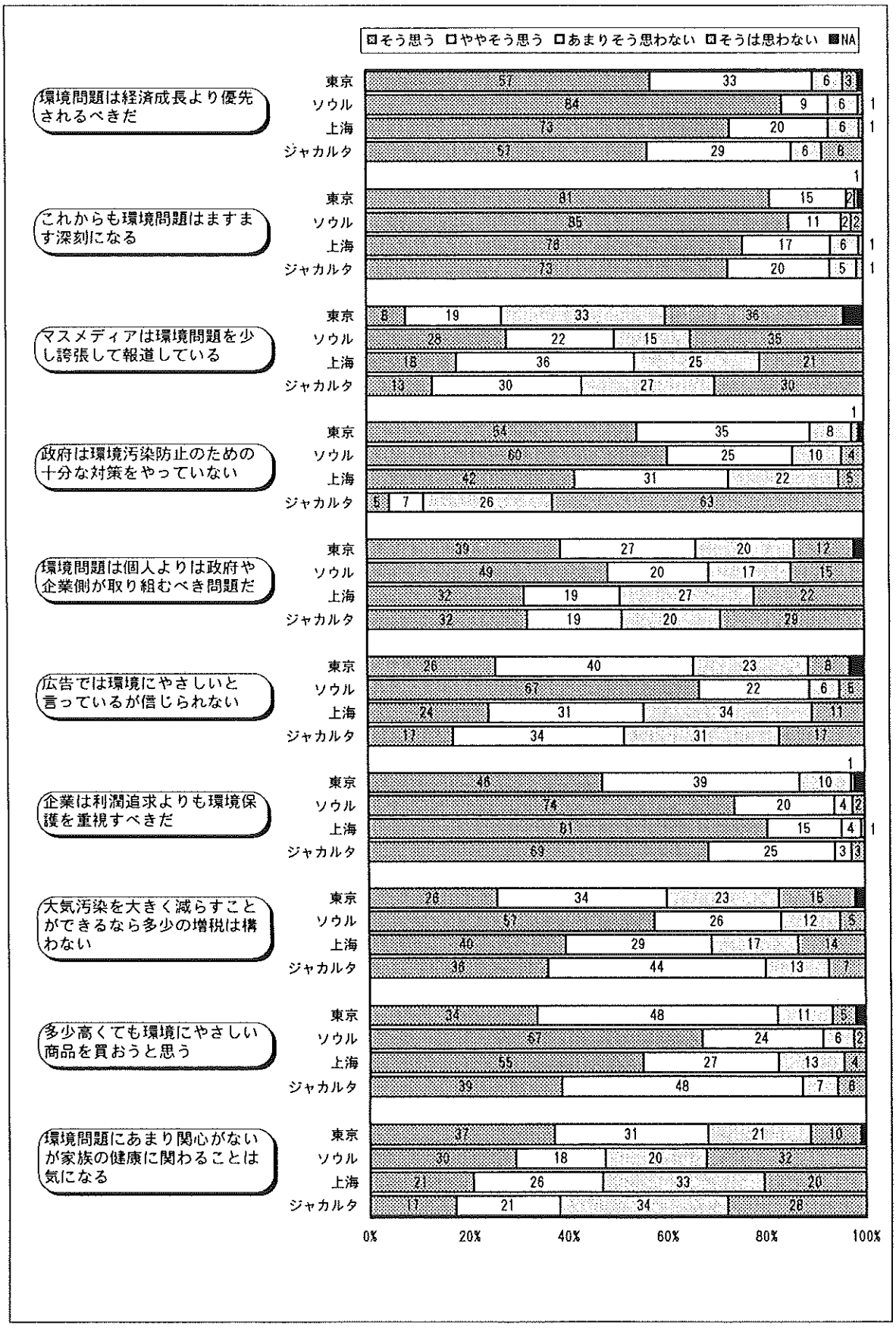
このような中で東京は、他の3都市と比較して、全体的に反応が弱く、「環境問題は経済成長よりも優先されるべきだ」「企業は利潤追求よりも環境保護を重視すべきだ」などの「べき論」も強くみられなければ、「大気汚染を大きく減らせるなら多少の増税はかまわない」「多少高くても環境にやさしい商品を買おうと思う」などの自らの意志・覚悟も弱い。

これとは逆に、ソウルではどの項目に対しても「そう思う」と回答する割合が高い。特に、「環境問題は経済成長より優先されるべきだ」(84%)、「広告では環境にやさしいと言っているが信じられない」(67%)、「大気汚染を大きく減らすことができるなら、多少の増税は構わない」(57%)、「環境にやさしい商品を買おうと思う」(67%)については、他の都市を10ポイント以上引き離している。

また、上海については、ソウルと同様に「環境問題は経済成長より優先されるべきだ」(73%)という意見が多いが、同時に「企業は利潤追求よりも環境保護を重視すべきだ」(81%)という意見も多い。

ジャカルタは東京と同様に全体的な反応が弱いが、「政府は環境汚染防止のための十分な対策をやっていない」については否定する率が63%と最も高くなっており、ここでも政府政策に対する評価がみられる。

図表－8　環境に対する考え方



図表－9　環境意識とライフスタイルのカイ2乗検定の結果
（＊:有意水準5%、　＊＊:有意水準1%）

環境に対する考え方＼ライフスタイル	機会があればボランティア活動をしたい				調理済み食品や半調理済み食品をなるべく使いたい				将来のために備えるより毎日の生活を充実させたい				健康のために食べ物に気をつけたりやスポーツを心がけている				テレビ番組やニュースの海外情報や外国の生活に関心がある				良い社会をつくるためには個々人の努力だけではあまり効果がない			
	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ
環境問題は経済成長より優先されるべきだ																								
これからも環境問題はますます深刻になる																								
マスメディアは環境問題を少し誇張して報道している						＊＊			＊				＊＊	＊＊				＊＊	＊		＊＊	＊		
政府は環境汚染防止のための十分な対策をやっていない															＊									
環境問題は個人よりは政府や企業側が取り組むべき問題だ	＊	＊＊		＊＊		＊＊	＊		＊					＊										＊＊
広告では環境にやさしいと言っているが信じられない																			＊			＊＊		
企業は利潤追求よりも環境保護を重視すべきだ																								
大気汚染を大きく減らすことができるなら、多少の増税は構わない			＊								＊			＊				＊			＊＊			
多少高くても環境にやさしい商品を買おうと思う											＊		＊＊							＊				
環境問題にはあまり関心がないが家族の健康に関わることは気になる			＊			＊					＊			＊＊				＊＊				＊＊		

また、図表9には、環境についての考え方とライフスタイルの関係の有無をカイ2乗検定を使って分析した結果を示す。東京やソウルを中心として、マスコミの報道、個人か政府・企業かの問題の所在、環境関係の増税、家族の健康に関連した考え方が、第2章で分析したライフスタイルと関係があることがわかる。

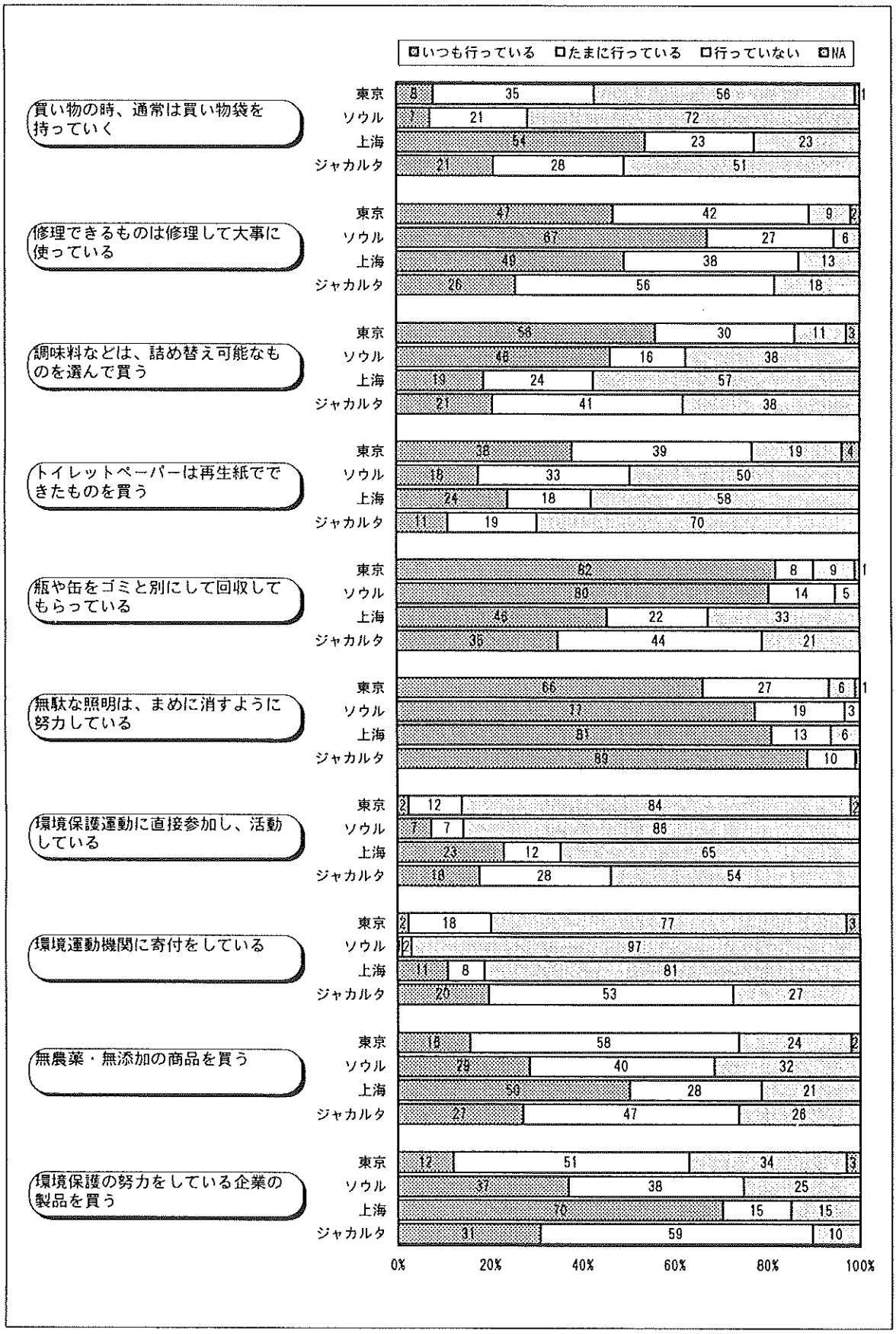
(3)　環境保全行動

各国に共通する生活者レベルでの環境保全行動を10項目設定して質問したところ、4都市全体でよく行われているのは「無駄な照明はまめに消すように努力している」で、最高のジャカルタでは89%が、最低の東京でも66%が「いつも行っている」と回答している（図表10）。

東京、ソウルの実施率が高いのは、「瓶や缶をゴミと別に回収してもらっている」「調味料などは、詰め替え可能な容器のものを選んで買う」など、流通や回収のシステム整備が必要なものである。また、消費の水準では東京と肩を並べるソウルは、「修理できるものは修理して大事に使っている」が67%と、東京の47%を大きく上回っている。

上海だけが突出して実施率が高いのは、「環境

図表－10　日常的に行っている環境保全行動



保護の努力をしている企業の製品を買う」(70%)、「買い物の時買い物袋を持っていく」(64%)、「無農薬・無添加の食品を買う」(50%)である。買い物袋を無料でくれるサービスがまだ普及していないこと、無農薬・無添加の食品しか売っていないことなどがその理由であると考えられる。

ジャカルタでは他に比べて「環境運動機関に寄付をしている」(20%)が多い。

これらの環境保全行動は、単純に環境意識が高まればそれが行動にあらわれるとはいえないところがある。各国の制度の違いや環境にやさしい商品の有無などで異なる点が多いからである。例えば、上海の人々が買い物袋を持参するのは、店からビニール袋をもらえないからであり、日本以外の国ではスーパーマーケットなどで再生紙のトイレットペーパーを探し出すのは至難の技である。また、制度的にゴミの分別収集が定着しているのは東京、ソウルくらいで、ソウルの場合にはゴミ収集が有料化されている。

特に解釈に注意しなければならないのは、環境保護団体に寄付していると答えた率が、ジャカルタで一番高かったことであろう。アンケート後の現地でのインタビューでは、町ごとにゴミを集めて収集する業者にお金を出しているが、彼らは企業よりは「ゴミ収集団体」のような形の組織だそうである。インタビュー対象者に、われわれが思う一般的な環境保護団体に寄付をしているといったことを聞いたことがありますかとたずねたところ、聞いたこともないし、自分もやったこともないという回答が返ってきた。厳密にはいえないが、

図表－11　環境行動とライフスタイルのカイ2乗検定の結果
(＊:有意水準5%、　＊＊:有意水準1%)

ライフスタイル / 環境保全行動	機会があればボランティア活動をしたい				調理済み食品や半調理済み食品をなるべく使いたい				将来のために備えるより毎日の生活を充実させたい				健康のために食べ物に気をつけたりやスポーツを心がけている				テレビ番組やニュースの海外情報や外国の生活に関心がある				良い社会をつくるためには個々人の努力だけではあまり効果がない			
	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ	東京	ソウル	上海	ジャカルタ
買い物の時、通常は買い物袋を持っていく	＊＊		＊																					
修理できるものは修理して大事に使っている				＊＊						＊＊														
調味料などは、詰め替え可能な容器のものを選んで買う						＊＊					＊				＊＊							＊		＊
トイレットペーパーは再生紙でできたものを買う	＊												＊	＊＊				＊				＊＊		
瓶や缶をゴミと別にして回収してもらっている							＊								＊				＊					＊＊
無駄な照明は、まめに消すように努力している																								
環境保護運動に直接参加し、活動している	＊＊																							＊＊
環境運動機関に寄付をしている			＊＊										＊	＊＊			＊							
無農薬・無添加の食品を買う	＊																							
環境保護の努力をしている企業の製品を買う										＊			＊		＊		＊							

ゴミ収集なり、環境美化のために町の組織などにお金を出しているのを寄付であると考えているように思われる。

また、図表11には、環境行動とライフスタイルの関係の有無をカイ2乗検定を使って分析した結果を示す。

東京ではボランティア志向や健康志向、海外生活への関心が、買い物をする時の商品選択などの行動や環境保護活動への参加といった環境保全行動と関係している。

また、ソウルでは将来よりも現在の生活の充実志向、健康志向、良い社会をつくるには個人の努力だけでは効果がないといった考えなどが、商品選択に関連した環境保全行動に結びついている。

上海は、一見、多くのライフスタイルと環境保全行動との関連があるようにみえるが、買い物袋持参、詰め替え容器の商品の選択、無農薬・無添加食品購入などの行動が意識の中で環境と結びついていないとすれば、解釈が難しい。

ジャカルタは、ボランティア志向、良い社会をつくるには個人の努力だけでは効果がないといった考えがゴミの処理や環境保護運動などに関係している。

(4) 環境に関連した情報との接触

環境問題に関する情報について、日常的な接触と、必要性についての質問をした結果を、図表12に示す。4都市の特徴は以下の通りである。

東京は、すべての種類の情報について「接触している」との回答が4都市の中で最も少なく、最高でも「環境が生活に及ぼす影響」に関する情報への接触の45%にとどまっている。このためであろうか、すべての種類の情報について「接していないが欲しい」との回答が4都市の中で最も多い。

ソウルでは、「環境が生活に及ぼす影響」(79%)、「環境問題の原因」(77%)、「地球汚染の情報」(71%)に接する人が多いが、「環境問題に対する企業の取り組み」情報への接触は42%と少ない。

上海では、「環境が生活に及ぼす影響」に関する情報への接触は84%と4都市中最も多いが、「環境保護団体」や「世界的な環境保全の動き」に関する情報への接触はそれぞれ23%、32%と低い。

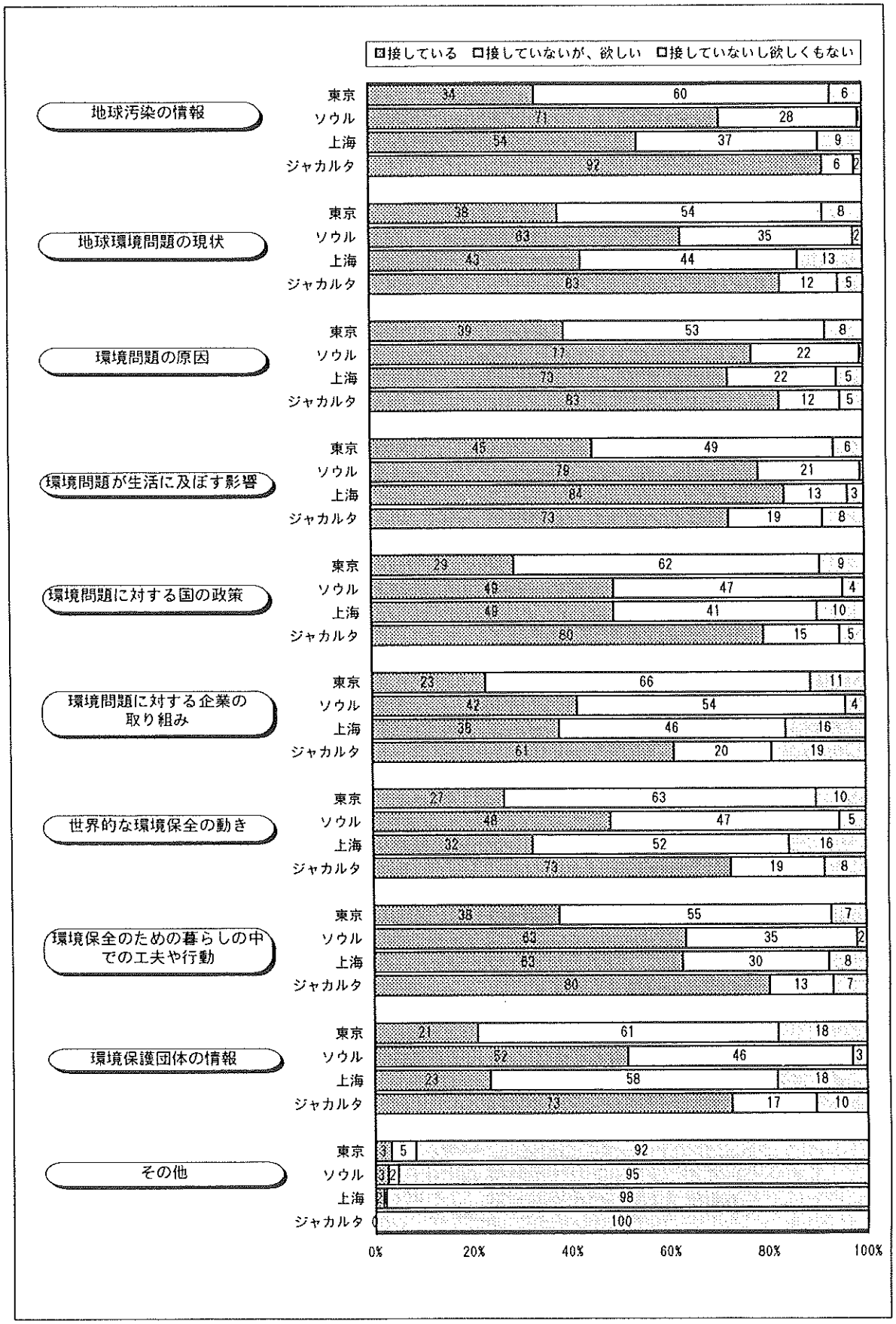
ジャカルタでは、「環境が生活に及ぼす影響」に関する情報への接触が4都市中第3位であることを除き、どの種類の情報であっても「接触している」との回答が4都市の中で群を抜いている。中でも、「地球汚染の情報」(92%)や「環境汚染に対する国の政策」情報(80%)、「環境保全のための暮らしの中での工夫や行動」(80%)などが顕著である。

以上のことから、東京以外の3都市では、特に環境問題の原因、生活への影響、生活の中での工夫など、生活を中心とした環境に関する情報には、よく接していることがわかる。

また、環境に対する知識・情報を得るのはどのようなメディアからかを、現在と5年前について聞いたところ、どの都市においても、現在も5年前も、テレビ、新聞などのマスコミが中心的な情報源となっている(図表13)。

現在の情報源に関する都市別の特徴はというと、東京は、他の都市に比べ雑誌をあげる人が多いが、ラジオや自分の経験をあげる人が少ないこと、ソウルは、雑誌をあげる人が他都市と比較して少ないこと、上海は、友人・知人、家族、勤務先など、電波や紙媒体以外の情報源をあげる人が多いことなどがあげられる。ジャカルタは、上海以上に、友人・知人、家族、勤務先など、電波や紙媒体以外の情報源をあげる人が多い。また、自分の経験からや宗教団体の活動、自治体の広報物も4都市の中で突出している。

図表－12　接している環境情報の種類とニーズ



図表－13　環境に関する情報の情報源

左欄：現在環境情報を得ているもの(%)
右欄：５年前に環境情報を得ていたもの(%)

メディア	東京		ソウル		上海		ジャカルタ	
新聞	86	47	90	75	96	92	100	94
雑誌	59	29	30	20	51	44	64	50
テレビ	91	53	98	88	96	80	100	94
ラジオ	36	17	59	38	66	58	95	87
書籍	38	17	27	13	41	33	59	46
パソコン通信	2	1	2	0	2	0	5	2
ビデオ	9	4	12	3	10	1	15	7
FAX通信	2	1	1	1	1	0	4	3
CD	5	2	0	0	1	0	1	0
CDROM,ﾊﾟｿｺﾝｿﾌﾄ	1	1	1	0	1	0	2	2
環境保護団体広報誌	14	6	19	5	14	5	25	15
自治体広報物	28	14	17	3	15	7	40	26
宗教団体の活動	4	3	12	4	1	1	65	51
友人・知人との会話	44	19	57	27	68	48	100	94
家族との会話	35	12	42	19	55	35	100	96
勤務先から	25	13	21	9	60	40	67	51
自分の経験から	24	9	50	17	73	54	92	88

また、５年前の情報源と現在を比較すると、東京はほぼ全部の情報源について、環境情報の入手が倍増していること、ソウルや上海では環境保護団体や自治体の広報物からの入手が倍以上となっていること、ソウルでは特に、マスコミ以外の増加が著しいことなどがあげられる。

東京の５年前における環境問題の関心は、少なくとも現在以上であり、そういう意味では情報量も多かったと推測できる。それにもかかわらず、５年前の情報源の想起レベルが低いことは、人々の印象に残るような環境に関する情報がなかったためか、あるいはこの５年間に環境問題以上にインパクトの強い情報－例えば、95年前半の阪神大震災、オウム真理教等－がありすぎたためと考えられる。

結　び

東京、ソウル、上海、ジャカルタという、経済発展段階が異なる４地域の国と個人の経済状況の認識は、国の面でも個人の面でも、ジャカルタ、上海、ソウル、東京の順に肯定的な反応が多い。ジャカルタの人は、国も自分も経済的に成長し、豊かさを感じるようになり、これから先も多分経済状況は良くなると期待している。しかし、現在の個人の経済レベルにはジャカルタを除いてかなり不満を持っている。それは「満足感」というものは収入とか経済指標といった客観的に計測できるものではなく、生活上で身近に感じられるものから生じるからであると思われる。バブル崩壊後厳しい状況に置かれているとともに数々の社会問題が発生している東京や、高度成長時代のつけが回ってきて大型事故が多発するソウルでは、経済的な成長が満足とは結びつかないという制約要因が数多く存在しているといえる。また上海の場合、深刻をきわめる環境汚染を始め、貧富の格差からくる不満、市場経済の導入による欲望の噴出が人々に不満をもたらしていると思われる。

このような制限ないし不満要因の存在により、人々は次第に、自分と国とを判断する別々の基準を持つようになると思われる。既に東京の人々は個人の経済認識に国の経済成長といった要素の影響をほとんど受けていないことをみても、国の経済が発展し個人の所得も増大するのに伴って、個々人は自分なりの「満足」や「豊かさ」に対する基準をもつようになるといえる。これは本調査研究のライフスタイル項目の結果からも裏付けられる。

対象とした４都市はそれぞれ他の都市とは異なる特色を表しながらも、「自分なりの生きがいを感じる生き方をしようとする生活姿勢」を共通して持っているようにみえる。特に、このような態度を持つようになったのはここ５年の間のことであることと、その５年の間自分の態度を変えた人

が一番多かったのは東京であることに注目する必要があるだろう。これは、経済発展により人々の価値観や行動などのライフスタイルが変化を迫られるようになるが、おそらく生活の物質的な安定の段階をこえてから、本物の生活の質や自分らしい生き方や生きがいを追求しようとする欲求が激しく噴出する、ということを表すものではないだろうか。もちろんバブル崩壊後の不況から、リストラの脅威と緊縮財政、大震災などが、人々を物質的な満足を追求するパターン化された満足スタイルから、多様な生き方を指向する満足スタイルに変えさせた、というのが一つの説明になるかも知れない。

そして、同じライフスタイルでも、環境問題に対する意識や行動に関しては、既に物質的には豊かな生活が実現している東京では、ライフスタイルが一番大きく変化し、つまり価値観そのものが揺らぎ、何が本当に大切なのかが見えなくなっている。その結果として、環境問題に対する意識も他の都市に比べてあいまいになり、行動も、地域のルールとして守らなければならないゴミ回収などは別として、環境保護運動への参加や寄付など自発的な意識を伴うものにおいては他の都市よりも低迷している。ソウルはまた、高度成長の後での公害、最近の大型事故など、社会全体が抱える問題がライフスタイルに影響し、その結果として環境問題に関するメディアや政治、企業への不信感を招き、東京と同じような環境保全行動のレベルにとどまっている。一方で、上海やジャカルタは、物質的な生活向上の意識が強い中で、環境問題といえば、まだまだ身辺の美化、清潔さの保持といったレベルではあるが、政府等のキャンペーンによって、それが、経済生活の向上につながるという価値観が浸透している。もちろん、宗教的な背景や、地域コミュニティの存在も大きな要因ではある。

最後にこの研究を通してこれからのこの地域の発展に関わる部分を少し言及したい。

先に経済発展に成功した国が試行錯誤の末に獲得した技術・ノウハウを、後発国が吸収することでより急速な発展を遂げることが可能なことを「後発性の利益」と呼ぶ。アジアの開発途上の地域の発展の成功はこの後発性の利益を生かすか否かにかかっているし、この地域が悩んでいる環境問題も実に「先進国の経験」から学ぶことが大きいだろう。それは環境問題を盾にして国際貿易を規制しようとする動きにへの対応としても必要である。

本調査では思ったよりは発展段階による環境意識や行動の差は出なかった。それはある程度この地域が後発性の利益を生かし、早い段階から環境問題に対する広報や制度作りに着手したからであると思われる。例えば上海のキャンペーン（「七不徳運動」、写真参照）は、身近なことではある

が、国民に環境に対する関心を喚起させるには効果があると言える。この様なことにより環境問題を人々のライフスタイルに浸透することができ、それは国の政策作りにも影響を与えるようになるだろう。そして、それによってまた環境を顧慮した発展様式が採択されるようになり、「持続的な発展」がこれからの発展様式のスローガンになっている今日にふさわしい経済発展を遂げることができる。もちろん、現在の政策制度には実効性に問題がないわけではないが、生活者に与える影響は大きいと思われる。

＜参考文献＞

ADB(1994), *Key Indicators of Developing Asian & Pacific Countries.*

Katona,G(1975), *Psychological Economics*, New York : Elsevier.

Van Raaij,W.F., Van Veldhoven, G.M, and Warneryd, Karl-Erik(1988), *Handbook of Economic Psychology*, Kluwer Academic Publishers.

井村秀文・勝原健編著(1995)『中国の環境問題』東洋経済新報社

小島麗逸編（1993）『地球環境問題と発展途上国』アジア経済研究所

小島麗逸・藤崎成昭編（1993）『開発と環境－東アジアの経験－』アジア経済研究所

さくら総合研究所 環太平洋研究センター（1995）『新世紀アジアの産業を読む』ダイヤモンド社

ジャカルタ・ジャパン・クラブ（1994）『インドネシア・ハンドブック』

千石　保・丁　謙(1992)『中国人の価値観』サイマル出版会

ニッセイ基礎研究所（1993）『都市生活者のエコライフ調査研究報告書』

日本能率協会総合研究所（1994）『中国生活者の実態調査報告書』

三菱総合研究所編（1994）『中国情報ハンドブック』蒼蒼社